

Title	「大阪大学 大学教育実践センター紀要」創刊にあたって
Author(s)	
Citation	大阪大学大学教育実践センター紀要. 2005, 1
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/10089
rights	本文データはCiNiiから複製したものである
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

『大阪大学 大学教育実践センター紀要』 創刊にあたって

平成16年4月1日、国立大学法人化と期を一にして大阪大学では従来の全学共通教育機構を改組し、新たに大学教育実践センターを設置いたしました。ここにお届けする紀要は、本センター内の研究部門である「教育実践研究部」を中心に刊行される最初の研究誌になります。

ところで、「大学教育実践センター」という名称は少しく奇異に聞こえるかもしれません。従来日本の大学で設置されてきた同種のセンターは、多くの場合、大学教育研究センターという名称を担っているからです。これらのセンターは大学教育ないし高等教育についての研究を本務としているのです。それに対し、本学のセンターの本務は、一方で従来の全学共通教育の運営上のコーディネートにあたるとともに（共通教育実践部）、他方で大学教育を実践するうえでの様々なシステム改革を提言し、全学共通教育をフィールドとしてその実現に努める（教育実践研究部）という点に特色を有しています。したがって、大学教育ないしは高等教育に関する高度な研究を遂行するというよりは、むしろ様々な専門分野の教員が共同して教育を実践していくうえでの様々なプロジェクトを企画し実施するということが求められているのです。一例を挙げてみましょう。たとえば現在、大学教育では必須の事柄のように言われている学生による教育評価を実施する場合、学生の生の声を聞くことはもちろん大切なことですが、教員がこうした評価に慣れていないのと同様に学生も慣れていない、言い換えれば評価能力を十分に身に付けていないという点に目を向けることが必要になってきます。評価のもつ意味は、学生と教員とが相互に共同して教育を形成していく点にあります。つまり両者の相互陶冶が可能になる教育の実践はいかになされるべきか、さらにその場合、そもそも陶冶とは何をめざしているのか、そのことを明らかにし、なによりも具体的に試み実践することが求められています。私たちは、そうした教育プロジェクトの可能性を探っていきたいと願っているのです。

私たちが大学教育、特に学士課程における教育の核とみなしている共通教育の場合、専門教育の基礎的役割と並んで、幅広い教養と人間性の育成が目標として掲げられています。しかし教養とは何でしょうか。人間性という言葉で私たちは一体何を理解しているのでしょうか。大学院重点化の結果、専門研究の場は大学院に移行し、それに伴い学士課程のもつ役割は、広義での教養教育及び専門基礎教育に特化してきています。それに伴い、ますます教養教育の本来の意味と21世紀における新たな教養教育の方途とが問い直されてきているのです。それにもかかわらず大学は、もはや独自の情報発信能力、単純に言えば創造力を喪失してしまっているとしか言い様がない状況にあります。こうした状況のなかで、本センターでは、教員自らの教育と研究を通して教育実践の可能性を探求するという困難な道を敢えて進もうとしているのです。本誌はそうした試みの第一歩であり、今後は様々な分野の方々からご意見をいただき、私どもの活動の糧とさせていただくとともに、本誌を教育のフォーラムの場としていきたいと願っています。

2004年12月

大阪大学 大学教育実践センター
教育実践研究部長 溝口宏平